【実践記録】

『ふるさと』とともに歩く

斉藤俊雄—埼玉・久喜市立太東中学校

『ふるさと』誕生

東日本大震災の後、多くの人が「何かできないだろうか」という思いを持ちました。私もその中の一人でしたが、その「何か」を具体的な「何か」にすることはできないでいました。そんな時、東日本大震災の報道で、岩手県の大船渡市立赤崎中学校が津波の被害に遭ったことを知りました。私の心は大きく揺さぶられました。大船渡市立赤崎中学校は過去に『夏休み』と『降るような星空』という私の作品を文化祭で上演してくれた学校だったからです。その時、私の「何かできないだろうか」という気持ちは、「何かできるはずだ」に変わりました。そして、たどり着いたのが『ふるさと』という劇の創作でした。

被災地の子どもたちのための劇というと、被災地の子どもたちのために劇を上演しにいくことを考えがちです。しかし、スターやアイドルならともかく、私がそのようなことを試みれば、独りよがりの善意の押しつけになってしまう可能性が大です。『ふるさと』は「被災地で誰かが上演するための劇」ではなく、「被災地で被災地の子どもたち自身が上演するための劇」というコンセプトで創作しました。

劇を観終わった後、観た人の心があったかくなる劇を創りたいと思いました。そして、誰かの心をあったかくしたことで上演に関わった人たちの心もあったかくなる劇、そしてみんなが元気になる劇を創りたいと思いました。

『ふるさと』は震災がきっかけで生まれた作品ですが、そ

の中には震災に関する場面や言葉は一切出てきません。震災に関する場面や言葉によって、辛くなったり悲しくなったりすることもあると考えたからです。そして、震災を振り返る劇ではなく、震災を乗り越え未来へ向かって歩き出す劇にしたかったからです。

場面設定は、そこに机と椅子があればどこでも上演できるように全場面教室にしました。『ふるさと』は、子どもたちが歌う「ふるさと」の合唱で始まり「ふるさと」の合唱で終わります。場面と場面は、子どもたち自身が歌う「ふるさと」のハミングで繋がっています。音響設備は必要ありません。音響効果は子どもたちの歌声です。音響効果に「ふるさと」の歌声を使うことによって、『ふるさと』は学級劇としても、学年劇としても、学校劇としても、更に観客を巻き込んだ形でも上演できる劇となりました。「ふるさと」の合唱に参加することで、どんなに人数が多くても全員が参加することができるからです。

『ふるさと』とともに歩き始める

最初に『ふるさと』を上演したのは、当時、顧問を務めていた久喜市立久喜中学校演劇部です。東日本大震災の四か月後、夏の演劇発表会が終わった後の部室で、『ふるさと』という劇を創りたいということを伝えました。半年後、『ふるさと』は「古川里美（＝ふるさと）が転校してきたことで、故郷に特別な思いを持っていなかった子どもたち全員が故郷を好きになるドラマ」となりました。久喜中学校演劇部が地区大会で上演した『ふるさと』は、埼玉東部地区代表として関東大会に出場することとなりました。そして、関東大会で金賞を受賞しました。

その一週間後、私は現在勤めている久喜市立太東中学校に異動となりました。ただ、『ふるさと』の上演は続くことになります。それは、関東大会の後、全国大会に推薦されたからです。嬉しいことに、『ふるさと』との歩みは、全国大会でもゴールとはなりませんでした。道は更に先へと続いていたのです。

更なる道を歩いていく

全国大会での上演の前のことです。『ふるさと』を創るきっかけとなった大船渡市立赤崎中学校から私の脚本の上演依頼が届きました。上演依頼書には、文化祭で二年生が『魔術』、三年生が『夏休み』を上演すると書かれていました。赤崎中学校の文化祭が開催される日が日曜日だったので、私はその文化祭を見に行きました。そして、その日は忘れられない一日となったのです。

私は文化祭前日に盛岡のホテルに泊まり、文化祭当日の早朝、車で大船渡市に向かいました。盛岡を出てしばらくは、一年前に震災があったということが感じられない岩手県のの

どかな風景を楽しむドライブが続きました。しかし、陸前高田市に下っていく途中、その風景が一変したのです。

突然、海まで見渡せる風景が目に飛び込んできました。それは、ある場所から向こうの町が廃墟と化しているという衝撃的な風景でした。私は車から降りてしばらくそこに立ち尽くしました。その風景は、大船渡市に入ってからもずっと続きました。津波の爪痕が残されたままの風景の中を運転し続けた後、仮設校舎という形で高台に移転した赤崎中学校に到着しました。赤崎中学校の校長先生から、震災で生徒と教師全員が無事だったのは、学校が海の目の前にあったからだという話を伺いました。海の目の前にある学校だったから、地震が起きた直後に避難を開始して全員助かったそうです。

赤崎中学校の文化祭は、仮設の校舎の裏側に建てられた仮設の体育館で行われました。体育館は仮設でも、そこで行われた文化祭は本物でした。あまりの素晴らしさに私は何度も涙を流しました。文化祭全体が、前に向かって歩いていこうという子どもたちと先生方の思いにあふれていたのです。私が書いた『夏休み』と『魔術』は、そんな思いに満ちた中で上演されました。それは、作者としてとても幸せな時間となりました。

赤崎中学校の先生からの提案で、私はその日の給食を二年生の教室で生徒と一緒に食べることになりました。「いただきます」のあいさつをする前に、私はみんなの前で『ふるさと』の話をしました。『ふるさと』という劇は、赤崎中学校のことを知ったことで生まれたという話です。その時、一人の男子生徒が突然立ち上がって「僕たちは来年『ふるさと』を上演します」と宣言したのです。そして翌年、本当に赤崎中学校から『ふるさと』の上演依頼が届きました。

思いを届けに

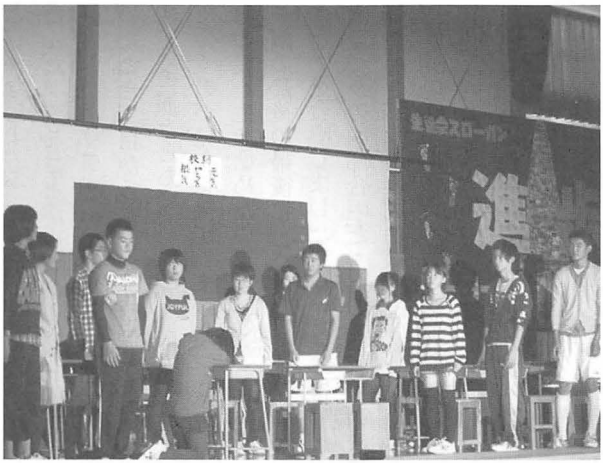
実は、私が「何かできるはずだ」と思った「何か」には続きがありました。私は、もし本当に自分が書いた劇を被災地のどこかの学校が上演してくれることになったら、その手伝いをすることで子どもたちを応援することができるのではないかと考えていたのです。私はその思いを実現するために、「『ふるさと』の劇づくりの手伝いがしたい」と、赤崎中学校の先生方に伝えました。その後、赤崎中学校の副校長先生から指導を依頼する連絡が入りました。私の「何か」は形をもって動き出したのです。

勤続三十年の教師は、リフレッシュ休暇という休暇を取ることができます。ちょうどその年が私の勤続三十年に当たる年でした。私は、その休暇を使って赤崎中学校を訪問しました。そして、総合的な学習の時間の「劇づくりを指導する」講師を務めました。練習開始前に、生徒たちに配ったプリントには次のような言葉が書かれています。

「私がこれからみなさんに伝えることは、自分たちで演出する、赤崎中学校のメンバーが演じることによって輝く『ふ

るさと』を生み出す方法です」

私は自分の手で『ふるさと』を演出したいとは思いませんでした。私は『ふるさと』を通して「自分たち自身の力ですてきな表現を生み出す劇づくりの方法」を伝えたいと思ったのです。私は赤崎中学校の生徒たちに、私が劇を作る中で一番大切にしている「感情に台詞を乗せる方法」を伝えました。感情を自分の引き出しから取り出して、そこに台詞を乗せる方法です。



大船渡市立赤崎中学校『ふるさと』ラスト直前の舞台

劇の練習に利用したのは、主人公の女の子が自分の思いを実現させるために、腕相撲でクラスの男の子たちと戦うシーンです。『ふるさと』の中で一番動きのあるシーンです。練習を始めた直後は、みんな手に台本を持って演じていました。台詞を言っている生徒の心は動いているのですが、周りにいる生徒の心はあまり動いていないと感じました。そこで私は、どちらが勝つかわからない本当の腕相撲大会を行うことを提案しました。脚本の通りの勝ち負けになるとは限らない本気の勝負に、みんなが湧きました。そして、その腕相撲大会の後もう一度、腕相撲のシーンを練習しました。そこで私が目にしたのは、練習を始めた時とは比べものにならない、生き生きとした子どもたちの表現でした。

最後にみんなでラストシーンを演じることになりました。その前に上演する三年生全員を集めて、私がこの『ふるさと』という劇に込めた思いを語りました。そして、その話の後、「君たちにとって、ふるさとって何かな」と問いかけました。その時、昨年「『ふるさと』を上演します」と宣言した生徒が言ったのです。「僕にとってのふるさとは大船渡、この赤崎地区です。そして僕はこのふるさとが大好きです」と。その瞬間、三年生全体に熱い何かが伝わっていくのが感じられました。そして、その熱い何かに包まれた中で、ラストシーンが演じられたのです。

『ふるさと』のラスト近くで、賢太郎というふるさとが嫌いだった少年が、「ふるさとのいないふるさとなんてふるさ

とじゃないよ。ふるさとがいたから、ふるさとが好きになったんだ。ふるさとがいるふるさとが好きなんだ」と訴えるシーンがあります。賢太郎役の男子生徒がその台詞を言い始めたとき、目から本物の涙がぽろぽろとこぼれ落ちたのです。彼の涙とともに、一人一人の心の中に「ふるさと」が灯っていくのが見える気がしました。そして、一人一人がそれぞれの役を生き始めたのです。

劇の最後の最後に、スタッフも含めた三年生全員が「ふるさと」を合唱しました。驚いたことに、その「ふるさと」はアカペラの四部合唱だったのです。その素晴らしい合唱を聴いたとき、本番の成功は間違いないと確信しました。

放課後は、希望者だけが音楽室に集まって練習することになっていました。私が音楽室に入ると、そこにキャストが全員揃っていました。そして、みんな下校時刻ぎりぎりまで練習を続けたのです。総合の時間を使った劇練習では台本を手放せなかった生徒たちが、放課後の練習では全員台本を持たずに練習していました。私は質問攻めにあって休憩場所となっていた校長室に一度も行くことができませんでした。しかし、一度も休憩できないその時間はとっても幸せな時間でした。バスで帰っていく生徒を眺めながら校長先生が満面の笑顔で私に言った言葉は忘れられません。

「生徒たちの心に火がつきました。私たちは、まずは台詞を覚えなさいと言ってきたけど、まずは気持ちなんですね。気持ちができれば自然と台詞が入ってくる。目から鱗でした」

赤崎中学校の『ふるさと』は関西弁の『ふるさと』ではなく、大船渡の人たちが話す気仙語という方言の『ふるさと』でした。校長先生が中心になって主人公が使う関西弁を気仙語に変えたのです。赤崎中学校の『ふるさと』は、ふるさとの言葉で演じられる『ふるさと』になったのです。

思いが届いた日

そして本番の日がやってきました。いよいよ『ふるさと』の上演です。オープニングには赤崎中学校独自の絶妙な演出が施されていました。劇を上演する前に、三年生全員の写真が一人一人スクリーンに映し出されました。それは三年生が「自分にとってのふるさと」を言葉で大きく紙に書いて、それを胸の前で示している写真だったのです。多くの子どもたちが選んだ言葉は「赤崎」「大船渡」「家族」「友だち」「仲間」、そして「赤崎中学校」でした。一人一人の笑顔とその言葉が溶け合っていました。「赤崎中学校の生徒はそんなふるさとへの思いを胸に、『ふるさと』を演じてくれるのだ」と思うと、劇が始まる前から涙があふれてきました。

本番の舞台は私が手伝いに訪れた時とは比較にならないくらい、一人一人の演技が上達していて、劇が始まる前に少しだけあった不安は上演が始まってすぐに消えてしまいました。私は心地よく劇世界を楽しむことができたのです。ラス

トシーンで賢太郎が「ふるさと、行かないでよ」と言う場面では、私の目の前に座っていたおじいさん、おばあさんが、こぼれ落ちる涙を何度も何度もぬぐっていました。最後の「ふるさと」の合唱は三年生だけでなく、一・二年生、そして先生方、更に観客全員が参加する大合唱になったのです。

大船渡市立赤崎中学校『ふるさと』　最後の合唱は観客全員も参加した大合唱に

もちろん私も一緒に「ふるさと」を歌いました。ただ涙が止まらなくなって、しっかり歌えませんでしたが。

これからも『ふるさと』とともに

それから二年後の夏、赤崎中学校で私の作品を上演してくれた先生からメールが届きました。そこには、「異動先の陸前高田の中学校で『ふるさと』を上演します」と書かれていました。そして、メールの最後にはこんな言葉が添えられていました。

「東日本大震災で被災した陸前高田はまだ復興の途中ですが、この演劇を通して、生徒、保護者、地域の人が元気になれるように、取り組みたいと思います」

アメリカの作家マーク・トウェインにこんな言葉があります。

The best way to cheer yourself up is to try to cheer somebody else up.（自分を元気づける一番良い方法は、誰か他の人を元気づけてあげることだ）

私は、東日本大震災の後、「被災地発の劇で被災地の人たちを元気づけたい」という思いから『ふるさと』とともに歩き始めました。その歩みの中で、どれくらいの人を元気づけることができたのか、それはわかりません。しかし、確かなことが一つあります。それは、『ふるさと』とともに歩むことで私自身が元気になれたということです。私は、これからもこの『ふるさと』とともに歩んでいきたいと思っています。